



「あたらしい憲法のはなし」 ⑪

そこでこんどの憲法では、日本の国が、けつして二度と戦争をしないように、二つのことをきめました。その一つは、へ依頼も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものは、いっさいもたないということです。これから先日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といいます。「放棄」とは「すててしまふ」ということです。しかしみなさんは、けつして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行つたのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。

もう一つは、よその国と争いごとがおこつたとき、けつして戦争によつて、相手をまかして、じぶんのいいぶんをとおそうとしないということとをきめたのです。おだやかにそうだんをして、きまりをつけようというのです。なぜならば、いくさをしかけることは、けつきよく、じぶんの国をほろぼすようなはめになるからです。また、戦争とまでゆかずとも、国の力で、相手をおどすようなことは、いっせいしないことにきめたのです。これを戦争の放棄というのです。そうしてよその国となかよくして、世界中の国が、よい友だちになつてくれるようにすれば、日本の国は、さかえてゆけるのです。

みなさん、あのおそろしい戦争が、二度とおこらないように、また戦争を二度とおこさないようにいたしましょう。

潮流 から  
しんぶん赤旗10.31日付

平和と自由を愛した庶民派の歴史学者。27日に死去した三笠宮崇仁氏の自著からは、そんな人物像が伝わってきます▼戦前、皇族男子は軍務につくと定められていたことから1939年、陸軍大学校に。「今もなお良心の呵責にたえないのは、戦争の罪悪性を十分に認識していなかったことです」と述懐します。43年、陸軍参謀として中国・南京に赴任。そこで日本軍の残虐行為を知らされました▼略奪、暴行、放火、強姦。「罪もない中国の人民に対して犯したいまわしい暴虐の数かずは、いまさらここにあげるまでもない」。驚くのは44年、参謀でありながら日中戦争に疑問を呈し、幕僚に「内省」と「自粛」を促していたことです▼講和のや

りとりをまとめた文書の表題は、「支那事変ニ対スル日本人トシテノ内省」。筆者は若杉参謀。三笠宮の別名です。冒頭、言論が極度に弾圧されている中、一般幕僚が大胆な発言をするのは困難なので自分が発言する、と述べています。日本軍の毒ガス使用にも触れ、「聖戦」「正義」と宣伝される時代ほど事実は逆に近いような気がする、とも▼戦後は新憲法の「戦争放棄」を積極的に支持。50年代後半、「紀元節」復活を目指す動きにも歴史学者として反対しました。「偽りを述べる者が愛国者とたたえられ、真実を語る者が売国奴と罵られた世の中を、私は経験してきた。…それは過去のことだと安心してはおれない」▼モットーは、「真実は何か」。残された言葉の重みをいま改めてかみしめたい。

川柳  
え！日本が 核反対に反対つて  
海外に 大バカ日本 知らしめる  
安倍さんに 権力恐怖を 教えられ

大野啓子さん



第10回 いきいきまつり  
展示の部  
11月3日 9:30 ~ 16:30  
4日 9:30 ~ 15:30  
和歌山市民会館 展示室

ステージの部  
11月4日(金) 13:00~15:30  
和歌山市民会館市民ホール

お気軽においでください。入場は無料です。  
主催：年金者組合和歌山市支部